

っている。ただし、第二外国語が影をひそめる。なお、四六年三月に、東京外国語学校の最後の、すなわち四三年入学の学生が卒業。また、四八年の入学式は東京外事専門学校最後のものとなる。

存続七年間の東京外事専門学校の入学者数二三五名、卒業者数は、東京外国語学校入学者も含むが、九七名になる。三分の二の生徒が卒業しなかった（できなかった）ことになる。なお、創立以降の東京外国語学校時代（東京外事専門学校時代を含む）の独語科総卒業生数は九八三名である（選科卒業生を除く）。

## 四 東京外国語大学時代 一九四九年—現在

### 1 変遷

国立学校設置法の施行により、一九四九（昭和二十四）年五月三十一日、六九校の一つとして、東京外国語大学（四年制）が設置される。一二語科の一つドイツ学科として、英米、フランス、ロシア、イタリア、イスパニヤ、ポルトガル、中国、蒙古、インド、インドネシア、シヤムとともに設置された。学生定員は三〇名、ただし、翌年には四〇名になる。発足時の在籍者数は三四五名だが、時代の変化を受け、男女共学制が導入され、女子学生の入学が可能になった。なお、ドイツ学科の女子卒業生第一号は一九五四（昭和二十九）年の新制大学第二回卒業生根本よしである。この年に卒業した女子学生は他三名だった。なお、一八九七（明治三十）年より五五年間続いた専修科は廃止された。また、東京外事専門学校は、東京外国語大学に包括される形で、一九五一（昭和二十六）年まで二年間存続



藤田五郎



生駒佳年



畑中伊三郎

する。

一九五〇（昭和二十五）年当時のドイツ学科の教師陣および科目表は次のようである。畑中伊三郎は、講師として五〇年から約一〇年間教鞭をとった。

一九五〇（昭和二十五）年

専攻学科

ドイツ学科

外専教授兼外大教授

外大助教授兼外専教授

外専講師兼外大講師

外大講師

専攻科目（数字は単位数）

ドイツ学科 ドイツ語学・文学講座

ドイツ事情講座

生駒佳年

藤田五郎

畑中伊三郎

ワルテル・ロエン

ドイツ語初級 二四（第一年）

ドイツ語上級 二四（第二年）

普通講義 一二（後期）

特殊講義 一二（後期）

演習及講読 一六（後期）

卒業論文 一〇（後期）

この表より、一年次二年次の前期専攻語学の六コマ態勢がすでにあつたことが確認できる。一九五二（昭和二十七年）年、三年次以降の後期に、語学文学コース、国際関係専修コースの二コースが設けられ、科目表は次のようになっている。

専攻科目（数字は単位数）

ドイツ語学・文学講座

ドイツ語初級 一六（第一年）

ドイツ語上級 一四（第二年）

ドイツ事情講座

普通講義 語文専修 一二

特殊講義 語文専修 一二

演習及講読 国際専修 八

卒業論文 語文専修 一六

国際専修 一二

語文専修 八

国際専修 八

一九六四（昭和三十九）年、ドイツ科をドイツ語学科に改称。六八年から学園紛争が始まる。この時期、十分な授業も行うことができず、卒業式は変則的な形で行われた。藤田五郎は本学講堂で学生との団交の場に立ち会ったり、福山明治は学生課長として紛争の解決にかかわった。

一九六六（昭和四十一）年四月、これまで学生数四〇名一クラスのドイツ語学科の学生数は六〇名二クラスになった。この定員増加に伴い二つのポストが新たに認められ、松井利夫が六六年に、山口幸輔が六七年に着任した。ドイツ学科の教員は、日本人六名になる。さらに、一九七六（昭和五十一）年に、一般語学ドイツ語教員として、平野篤司が助手として着任した。所属は異なるが、協力してドイツ語教育に携わることになり、したがって、實際上、ドイツ語関係の教官は七名になったことになる。また、一九八六（昭和六十一）年、当時の大学入学志望者の増加という

社会的状況に基づき、全国的な国立大学学生定員の臨時増募が行われ、ドイツ語学科も学生の六名増を受け入れ、その引き換えとして（ただし、学生定員返還のときには同時に返還するとの条件で）教員ポストが一つ与えられることになった。従来から懸案だった事情ポストを補充することになり、八九年に小沢弘明が助手として着任。ドイツ語学科の日本人スタッフは八名になる。この後、一九九二（平成三）年に山口幸輔が急逝。このポストは、臨時増募の学生定員の返却に伴って返却する予定であったため、ドイツ学科として初めて任用法を適用し、九四年、後任としてドイツ人アンドレアス・ヘンドリッヒが講師として三年の期限付きで着任した。

一九九五（平成七）年、大学設置基準の緩和に伴い、本学も改革の作業に取り掛かる。長い議論の後、外国語学部を七課程三大講座に改組し、ドイツ語学科は欧米第一課程ドイツ語専攻となる。なお、欧米第一課程は英語専攻とドイツ語専攻によって構成される。教官組織も改組され、ドイツ語学科の教官はそれぞれ言語・情報講座、総合文化講座、地域・国際講座のどれかに属するようになった。

一九八六（昭和六十一）年の学生の臨時増募に伴い獲得したポストをなんらかの形で恒常的なポストにするのが学科の急務であった。このような折に、文部省から提案されたのが欧米第一課程としての、定員付き三年次編入制度（定員二〇名）である。従来から三年次編入という制度があったが、これは定員のないもので、学生を受け入れるのも受け入れられないのも自由であった。一九九七（平成九）年、欧米第一課程として定員二〇名の第三次編入制度を導入することが正式に認められた。専攻語ごとの定員が決まっているわけではないが、ドイツ語専攻は約六名を取ることが目安となっている。この制度導入により、言語・情報講座（ドイツ語専攻）に教授ポストが一つついた。このことにより、学生の臨時増員の返却の後にも、実質的にはドイツ語専攻として八名体制が確保されることになった。九七年には四名、九八年には五名が三年次に編入学した。

2 東京外国語大学時代の教師陣

日本人教官

新制大学の発足以来、生駒、藤田、畑中らが大学を去っていったが、それに伴い、また、幾人もの教官が着任している。奈良文夫は、一九四二（昭和十七）年本学卒、五七年に助教として着任、六五年教授、八二年に退官。野村滋は、一九四六（昭和二十一）年本学卒、五二年から非常勤講師を務めた後、五六年に助手として着任、六〇年に助教、六七年に教授、八七年に退官。藤田五郎退官の後、学科主任として長いこと学科のために尽力した。グリム童話の研究などで有名。八七年に『Spuren（野村滋先生退官記念論文集）』が刊行された。佐藤洋子は、一九五五（昭和三十）年本学卒で、五七年から二年間副手を務めた後、六二年から六四年まで助手として勤務。本学初の女性教官でもあった。福山明治は、一九五七（昭和三十二）年本学卒、六一年に副手になった後、六四に講師、六七年に助教、七八年に惜しくも病氣のために急逝。病氣療養中も、学生が自宅にまで授業を受けに行き、このことは新聞にも取り上げられた。もし今も存命中ならば、この年史をまとめるに最もふさわしい人であつたらう。中世語学が専門。菊池武弘は一九五七（昭和三十二）年本学卒、六二年から立教大学に転出する七〇年まで留学生課程の講師、助教を務める。専門はドイツ文学。

他大学出身者として山口幸輔（東大出身）、小沢弘明（東大出身）、アンドレアス・ヘンドリッヒ（ミュンヘン大学修士）がいる。山口幸輔は、一九六八（昭和四十三）年に熊本大学から講師として着任、七一年に助教、七七年に教授、野村退官の後、ドイツ語学科の学科主任として尽力し、一九九二（平成四）年に急逝。小沢弘明は一九八

九（平成元年）年に助手として着任、一九九六（平成八）年十月に千葉大学に転出。アンドレアス・ヘンドリッヒは一九九三（平成五）年に任用法により講師として着任、三年後の九六年に退官。

ドイツ語学科に属さなかったが、鈴木幸壽は、一九四三（昭和十八）年本学卒、五一年に社会学の講師として着任、七五年に学生部長、八一年十二月に学長就任。一九八五（昭和六十）年十一月に学長職を退き、現在和洋女子大、同短大の学長を務めている。

#### 外国人教師

一九五八（昭和三十三年）年秋、四五年にも及んで外語で教鞭をとったワルテル・ロエンの死後、以下の人が本学でドイツ人の外国人教師として教鞭をとった。

五九年四月から      ギュンター・オイゲン・パールト

六三年四月から      ヴイルフリート・シュルテ

六六年四月から      ペーター・キュンメル

ヴイルフリート・シュルテは、後に駐日ドイツ大使館などに長年勤務した。キュンメルの後任として一九六九（昭和四十四）年四月に着任したのがハインツ・シュタインベルグである。一九九三（平成五）年三月に六十二歳をもって辞職するまで二十四年の長きにわたって、本学のドイツ語教育に熱心に携わった。

一九七二（昭和四十七）年に、オーストリアのウィーン大学との間に交換制度が成立し、こちらからウィーン大学の日本語学科に教師を送る代わりとして、オーストリア人が一名外国人教師として本学の教壇に立つことになった。

二年交替を原則に、次のような人が着任している。

七三年四月から	ヘルガ・マルコ
七五年四月から	エルヴィン・コラー
七七年四月から	ヨハンナ・マティアアゼック
七九年四月から	エルンスト・シャイプ
八一年四月から	ブリギッテ・ペンチアス
八一年十月から	イルムトラウト・アルブレヒト
八三年十月から	フランツ・クンプ
八六年四月から	ペーター・ジャコムツツィ
八八年四月から	バルバラ・エーベルト
九〇年四月から	レナーテ・ジャコムツツィ
九三年四月から	コルネル・ツエーリック

なお、一九九六（平成八）年四月から現在まで、九四年にハインツ・シュタインベルグの後任として着任したオーストリア人マルティン・クバチェクがこのポストを占めている。

#### 現メンバー

現在、欧米第一課程ドイツ語専攻には、八名の教官が属している。所属別に示すと、次のような構成になる。

言語・情報講座 在間進（教授）、木藤冬樹（助教授）、成田節（助教授）

総合文化講座 松井利夫（教授）、谷川道子（教授）、平野篤司（教授）

地域・国際講座 増谷英樹（教授）、相馬保夫（教授）

言語・情報講座所属の在間進は、一九六七（昭和四十二）年本学卒、六九年に本学大学院修士課程を修了し、七九年に助教授として着任、一九九〇（平成二）年教授。専攻はドイツ語学。木藤冬樹は、一九八二（昭和五十七）年に専任講師として着任、九四年に助教授。専攻はフンボルト研究などのドイツ言語学。学習院大学出身。成田節は、東京都立大学を卒業後、一九八二（昭和五十七）年に本学大学院修士課程を修了、九七年助教授として着任。専攻はドイツ語学。

総合文化講座所属の松井利夫は、一九六二（昭和三十七）年本学卒、六六年に専任講師として着任、七一年に助教授、八〇年に教授。ロマン主義文学。谷川道子は、一九八七（昭和六十二）年に助教授として着任、九六年に教授。東京大学出身。専攻はドイツ演劇。平野篤司は、一九七三（昭和四十八）年本学卒、七五年に東京大学大学院修士課程を修了後、七六年に助手として着任、九四年に助教授、九七年に教授。専攻はドイツ文学。

地域・国際講座の増谷英樹は、一九七七（昭和五十二）年に専任講師として着任、七八年に助教授、八六年に教授。東京大学出身。ドイツ・オーストリア史の研究者。相馬保夫は、小沢弘明の後任として、一九九八（平成十）年に教授として着任。東京教育大学出身。専攻はドイツ史。現メンバーのうち半数が他校の出身者になっている。外国人教師として、一九九六（平成八）年に着任したドイツ人フランク・ミールケと、九四年に（二年間）ハインツ・シュタインベルグの後任として）着任したオーストリア人マルティン・クバチェクがいる。現在、三クラス制の一部導入、語彙集の作成など、様々な試みを行っている。

## 卒業生

新制大学としての昭和期（一九五三「昭和二十八」年から八八年まで）のドイツ語学科の卒業生は総計一、五〇二



名(うち女子四二〇)。卒業は原則として三月であるが、大学紛争の影響を受けて、六九年には三月と六月と九月の三回、七〇年は、三月と五月の二回行われた。平成期(一九八九「平成元」年から九七年)の卒業生は総計五〇二名(うち女子三三一名)。

新制大学での卒業者累計は、二、〇八〇名(うち女子七九二名)、語学文学専修課程は五〇六名(うち女子一九七名)、国際関係専修課程は一、五七四名(うち女子五九五名)である。なお、一九九八(平成十)年三月までのドイツ語学科卒業者の総数は、東京外国語学校、東京外事専門学校時代も含め、三、〇〇七名(うち女子七五一名)である。ちなみに、九七年度の卒業生は六四名(うち女子三三名)、そのうち語学文学専修課程一一(うち女子五名)、国際関係専修課程五二(うち女子二八名)である。ドイツ語学科に関する九八年度の入学志願者および入学者数(定員六〇)は、入学志願者四〇八名(うち女子二四八名)、入学者数は六三名(うち女子四三名)である。

#### その他

本学は、一九七八(昭和五十三)年にビーレフェルト大学、ギーセン大学、マールブルク大学、七九年にエアランゲン大学、ゲッティンゲン大学と大学間交流協定を結んでいる。この交流協定に基づき、文部省による学生国際交流制度(現在は短期留学推進制度と呼ぶ)によってドイツへ派遣した学生数は以下のものである。ビーレフェルト大学へは一〇名(うち女子七名)、ギーセン大学へは六名(うち女子一名)、マールブルク大学へは二一名(うち女子一五名)、エアランゲン大学へは五名(うち女子二名)、ゲッティンゲン大学へは一六名(うち女子八名)である。一時期、一度に四名の学生をドイツに送ることもあったが、文部省のアジア重視の政策のため、一九九六(平成八)年にはゼロ、九七年に補欠で一名送ることができただけだった。今後のこの制度の見直しは暗いと言える。なお、この制度を

使わずに、たとえばロータリー奨学金であるいは私費でドイツに留学した学生も多い。

## 五 大学院

一九六六（昭和四十二）年に大学院外国語学研究科修士課程が設置された。それまでドイツ語学、ドイツ文学などを専攻しようとする学生は、他大学の大学院に進学しなければならなかったが、これにより本学での大学院進学が可能になった。ドイツ語学・文学の学生はゲルマン系言語専攻に所属することになる。ゲルマン系言語専攻の学生定員は、英語専攻と合せて一〇名であるが、ドイツ語専攻はそのうち四名となっていた。しかし、定員をオーバーしてとすることは可能であり、九二年までの修了者は八五名である。七七年には、大学院地域研究科修士課程が設置され、ドイツ史などを専攻する学生にも、本学での大学院進学が可能になった。ただし、地域研究研究科では、専攻語による区別がないため、ドイツ語という区分はない。これにより本学大学院に外国語学と地域研究の二本柱ができたわけである。

しかし、時が経つとともに、本学で博士課程がないことの不便さが顕著になり、九二年、これまでの外国語学研究科と地域研究研究科が、アジア・アフリカ言語文化研究所の参加のもとに、一本化され、大学院地域文化研究科博士課程（前期・後期）が設置され、本学での博士号取得が可能になった。ドイツ語関係の学生は、前期課程（修士課程）の場合、ヨーロッパ第一専攻言語文化コースあるいは地域研究コースのいずれかに所属し、後期課程（修士課程）の場合、地域文化専攻に所属する。なお、ドイツ語およびドイツとの関わりで幅広く研究しようとする学生には前期課程国際交流専修コースへの道もあるが、ドイツ語関係でこのコースへの進学者は少ない。